リリカルなのは～グランガイツの息子～

れおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのは～グランガイツの息子～

【Ｎコード】
Ｎ８２０６Ｙ

【作者名】
れおん

【あらすじ】
リリカルなのはの二次小説
オリ主が嫌いな人は遠慮してください

第一話（前書き）

前回の作品を消してしまった（続き）ので新しく書きました

第一話

ハルトＳｉｄｅ
「おはよう、公開意見陳述会まで残すところあと7日だ。地上本部に色々な世界の重鎮が集まってくる。正直非常に面倒だが仕事は仕事だ。各自与えられた仕事をしっかりこなすように。以上だ、解散！！」
朝の朝礼を終わらせて部隊長室に向かった。
「ゲンヤさん、はっきり言ってあれって絶対あんたの仕事ですよね？」
「まぁいいじゃねえか。お前が面倒だからって受けてない魔導士ランクの試験ごまかしてやってるんだから」
はぁ、ま、仕方ないか
「わかりました。この事は触れないでおきましょう。ギンガも６課に出向させたらしいですね。どうするんですか？俺たちのメシ。」
俺は基本的にゲンヤさんの家でメシを食わせてもらっている。
「しらん。お前の彼女に作ってもらえ、俺は自分の分くらい作れる。」
「地獄に落ちろ！！」
そう言い残し俺は部屋を飛び出した。
まだ朝メシ食ってないのに
とりあえず、向こうが忙しくて無理な事はわかっているがとりあえず連絡してみた。
「あ～もしもし？はやて、今時間ある？実はさ今日の晩飯がないってことが今決定しちゃったんだよ。え？６課にメシ食べに行っていいの？ありがとう！！」
メシ確保が決定したので仕事に戻ることにした。
「今日の仕事はこれで終わり、今日は出動もなく無事終わったな」

そして今俺は部隊長室に来ている「失礼します、ゲンヤナカジマ部隊長殿、今から出向させたギンガの様子を見てきます。」
「んで本当のところは？」
「なんかはやてが６課でメシ食わせてくれるっていうからちょっと行ってくるわ。じゃあな！！」

車庫に入ってた俺のバイクに乗って６課の隊舎に向かった

「もしもし？ギンガか？実は今からそっちに行くんだけどさちょっと遅くなるってはやてに言っておいてくれる？あ、理由？ヘルメット忘れて管理局に追っかけられてるから撤いたらそっちに向かう。じゃよろしく。」
ギンガＳｉｄｅ
「あれ？もしもし？もしも～し…きれた。」
ハルトさんからの電話は一方的にきられた
「ギンガ、どないしたん？」
ちょうどはやてさんが歩いてきた「あ、はやてさん実は今ハルトさんから電話があってヘルメット忘れて管理局に追っかけられてるから撤いたらこっちに来るそうです。」
「はぁ～ハルトって副隊長になってもなんもかわらんなぁ。後でちょっとお話しなあかんかもな。管理局の人間が管理局に捕まるって絶対あかんやん！！」
「はやてさん、前から聞きたかったんですけどハルトさんのどこを好きになったんですか？」
「ここでその話はあかんよ！！…誰も聞いてなかったやろか？」
辺りを見回すはやてさん、あれ？今スバル達がいたような、教えた方がいいのかな？でもまぁいっか別に悪いことじゃないし。
私はスバルを見なかったことにした
数十分後
「八神部隊長、お客様がお見えになりました。」

ハルトさんやっと着いたんだ。
「ほなちょっと迎えに行ってくるわ。ギンガご飯運んどいてくれる？」
「わかりました。」
はやてさんは歩いて迎えに行った
「なぁギンガさっきはやてと話していたのって誰の事だ？もしかしてはやてに彼氏がいるのか？」
ヴィータさんがいきなり聞いてきた
「ヴィータさんまで聞いてたんですか？」
「で、本当のところはどうなの？」
フェイトさん…まぁ小さな頃からの親友だったって聞くし興味あるのかな？
「今から来る人にそれを聞いてみたらどうですか？」
ちょうど私がそういった時にはやてさんが戻って来た
ハルトさん頬っぺた真っ赤だ

「どうも陸士１０８部隊副隊長のハルト＝グランガイツだ、今日は本日から出向するギンガナカジマとその妹のスバルの様子を見に来た。ついでに晩ご飯をご馳走になる。よろしく！！」
「グランガイツと言うとゼスト＝グランガイツの息子か？」
シグナムさんが尋ねた
「ん？なんだ親父のこと知ってんのか」
「あぁ地上ではかなりの有名人だからな。」
「まぁ８年も前に死んじまったよ。武人だから不器用な人だった、湿っぽくなっちまったな、すまない。何か他に聞きたい事あるか？」
「は、はい。ハルトさんどうして頬っぺたが真っ赤になってるんですか？」
エリオが勇気を出して質問に行った。
「これはな……交通ルールをまもらなかった結果だ。」
嘘だ。ルールを守らなかったのは本当だけど絶対はやてさんにビン

タされてる
「はぁ～い、次はリィンの番です～。はやてちゃんとはどういう関係なのですか？」
多分この場にいる全員が一番聞きたかった質問だと思う、私は知ってるけど
「婚約者で（スパァーン）すみません、本当は『１０８部隊におった時の同期や』です。」
神業的なタイミングでかぶせた！！「グランガイツ、私と一つ模擬戦をしてみないか？」
「明日の朝でいいっすか？俺そこら辺で寝とくんで、それより先に晩ご飯を頂きたいんだが。」
そう言い残しハルトさんはご飯を取りに行った

「ねぇ、ギン姉、本当はどうなの？あの二人って、」
スバルがよって来て聞きにきた
「他の人に言っちゃダメよ？本当は3年前から付き合ってるらしいの。」
「やっぱり付き合ってたんだね」スバルだけが聞いていると油断していたらみんなに聞かれていた
ハルトさんはご飯を食べてるしその横で楽しそうに話しているはやてさん、あの二人をみたら誰だってわかる気がするけど。
「あの男は強いのか？」
「それが私ハルトさんが戦っているの見たことないんです。登録は陸戦Ｓ＋だけどごまかしているって言うか試験をさぼってて本当はＳＳＳ＋って言ってたし、ただ武器は剣らしいです。後は魔力量が異常に少ないらしいです。」
「魔力量が少ないのにＳ＋ってかなり凄いんじゃないですか？」
「それも嘘じゃねえのか？」
ヴィータさんが刺のある言葉を投げ掛ける
「それは全て明日の模擬戦でわかることだ」

明日に備えて私達は先に部屋に戻った。
ハルトＳｉｄｅ
現在俺はメシを食べおわり隊舎の外をはやてと歩いている
「なぁはやて、公開意見陳述会の前日に会えないか？警備で来るんだろ？どうしても伝えておきたいことがあるんだ。」
「それは今じゃあかんの？」
「今じゃダメなんだ。いいか？」「かまへんよ。」
「ありがとう！！それにしてもはやてが部隊作ってもう半年くらいたつのか？早いもんだな。」
「そうやね、でも私一人じゃここまでこれんかった。なのはちゃんにフェイトちゃん他にも色んな人の協力があってこの部隊は成り立ってるんや。」

「そっか、じゃあ俺も明日の模擬戦本気でやるかな。」
「ケガさせたらあかんよ？」
「善処するさ。…よし、隊舎に戻るか、俺はどこで寝たらいいんだ？」
正直食堂ではさすがに寝れない
「ほなわたしの部屋で寝る？」
「俺は今さらって感じだから構わないがお前の部隊長としての立場悪くなるんじゃないのか？男を連れ込んだとかで。」
「ほんまやなぁ。じゃあ部隊長室で一緒に寝よか、ここやったら万が一人にみつかっても言い訳できるし。」
まぁはやてがいいならいっか
「別にはやては部屋で寝てもいいんだぞ？」
「あかんよ、だってこうして直接会ったのも久しぶりやのにちょっとくらい一緒にいたいやん。」
「じゃあ行くか、大事なお姫様に風邪引かれたら困るしな。」
「そう思うてるんやったら、もっとこまめに連絡入れたらどうや？お姫様攫われてまうかもしれんで？」

微笑みながらそう言うはやて
「もし、そんな事になったらたとえ次元世界の最果てだったとしても助けに行って見せるさ。」
「頼りにしてるでおうじ様！！」
はやてが後ろから抱きついてきた俺はそのままはやてを背負って部隊長室に向かった。
外は肌寒かった筈なのに全く寒くない
この笑顔を守る為なら俺は命をかけて見せるさ
心の中でそう決心した

その日はそのまま部隊長のソファーで二人で寝た。

第一話（後書き）

感想くれると嬉しいです

第2話（前書き）

ストックが大量に出来たので定期的に更新できそうです

第2話

俺が機動6課に泊まった次の日
「ふぅ～…朝か、はやて～起きろ～」
「う～ん……あ、おはよう、ふわぁぁ～。」
「そろそろ訓練スペースで模擬戦待ってるんじゃないのか？」
「そうかもしれんなぁ～、シグナムは模擬戦すきやから、それにハルトのこと見極めようとしとんちゃうかな？」
「何の見極めだ？」
「ハルトがほんまにわたしにふさわしいかどうか。かな？」
冗談っぽく言ってくるはやて
「じゃあ気合い入れてくれるか？」
ギュッ
はやてを抱きしめた
「よし！！気合い入った。行くか、レイヴェルトセットアップだ」
「ここからバリアジャケットきて行くん？」
「…戦場で鎧を着始める戦士はいない。じゃあ行ってくる。ちゃんと見ていてくれよ！！」
俺は一人説明されていた訓練スペースに向かって行った
ＯＴＨＥＲＳＩＤＥ
ちょうどハルトが部隊長室を出て訓練スペースに向かい始めた頃
「色々あって忘れていたが時間を決めていなかった。」
騎手甲冑を着ているシグナムに
「どうせ逃げたに決まってる！！」刺々しい言葉を言うヴィータ
静かに待つＦＷ達と隊長達
「待たせたな。」
「てめえ遅い…ぞ」
ヴィータが怒鳴ろうとしたがハルトから溢れ出ている覇気のようなものに思わずひるんでしまった

「すまなかった、時間を決めていなかったのはこちらの落ち度だ。
では始めるとしようか。テスタロッサ、立ち会いをしてくれ。」
「はい。ルールはどちらかの先頭不能または降参です。」
「わかった」

「では、始め！！」
こうして模擬戦が始まった
「先手はもらう、はぁっ！！」
始まったとたんに接近し切り付けるシグナム
「モード1鋼鉄の剣（アイゼン・メテオール）」
先程迄の細い剣とは違う盾のような剣
ガキンッ
シグナムの初撃は弾かれた
「今度はこちらから行かせてもらう。」
振り下ろした剣を剣で防ぐシグナム
「その対応は悪手だ。爆ぜろ、爆発の剣（エクスプロージョン）」
シグナムとハルトの剣がぶつかった途端に大爆発が起きた
シグナムは爆風で弾き飛ばされたが、なんとか空中で体勢を持ち直した
「この程度でやられないでくれよ。烈火の将、どうした？こないならこちらから行かせてもらう、モード3音速の剣（シルファリオン）」
お前にこの斬撃がさばききれるかな？
ハルトが剣を一振りすると7つの斬撃が飛び出した、実際には7回斬っているが振っている本人にしかわからない。

「け、剣が見えない！！」
高速戦闘を得意とするフェイトですらも見ることができない剣
シグナムはじわじわと追い詰められていく
「レヴァンティン、カートリッジロードだ。」
「Ｊａ」

「紫電一閃！！」
炎を纏った剣で斬り付けるシグナム
「モード５真空の剣（メルフォース）」
剣の一振りで突風が起こりシグナムは動けなくなった
「あんまり魔法は使いたくないんだが仕方ない、エクプロード・カタストロフ」
シグナムの周囲に３本の爆発の剣が出てきた
「チェック・メイトだな？」
「私の負けだ。」
シグナムの敗北宣言により模擬戦は終了した

「す、すごい。リミッターを付けてるとはいえあのシグナムさんが何も出来ないなんて。」
「ハルトさんってあんなに強かったんだ！！」
驚くエリオとギンガ

「ふぅ、疲れた。」
訓練スペースから戻って来たハルト
「お疲れ様、シグナムはどうやった？」
「かなり剣技を磨いたいるな。俺も本気で行かないとやばかった」
「グランガイツ、あのデバイスはいくつ形態を持っているんだ？」
「全部で１０だ、まぁ手加減して使わなかったわけじゃないから安心してくれ。おっと、もうこんな時間か、俺は仕事に行くから。はやて、約束忘れるなよ！！」
「わかってるよ、ヘルメットないんやから、タクシー使うかなんかして行きよ！！」
「わかった。」
そういって歩きだすハルト
しばらく見ていると性懲りもなくバイクに乗って帰って行った
「あんのアホ～！！今度会ったときお話しなあかんな。…ほなみん

な朝練はせんと朝食食べにいこか」はやての指示でその場にいた全員が食堂に向かった
「なぁはやて、あいつが最後に言っていた約束ってなんだ？」
食事を取りながら尋ねるヴィータ「わたしもよくわからんのやけど公開意見陳述会の前日にどうしても会いたいらしいねん。」
「はやてちゃん、もしかしたらそれはプロポーズかもしれないわよ？」
シャマルの一言で場が騒然となる「プ、プロポーズ！！」
「そうなのか、はやて？」
「みんな落ち着き、シャマルが言うたのはもしかしたらって話やないの。」
「でも、もし本当にプロポーズだったらどうするの？」
「それは…（後でちょっとシャマル医務室行くな。）」
シャマルの横で小さな声で言った「（わかったわ。）」
「ほな、各自持ち場に行って、わたしら機動６課は地上本部の警備やから、しっかり準備しとかなあかんよ。」
「「「「はい！！」」」」
「いい返事や。隊長達もお願いするな？」
「任せてよはやてちゃん。」
「大丈夫だよはやて。」
答えるなのはとフェイト
「シグナムは一応後で医務室に来てね？一応だけど。」
「わかった」
「ほな、みんな今日も１日頑張って行こか！！」
はやての一言で各自動き始めた

医務室
現在医務室にははやて、シャマル、シグナムそしてザフィーラがいる
「もし本当にプロポーズやったらどうしよか。」
「はやてちゃんはあの人と一緒になってもいいの？」

「3年以上付き合って来たけどやっぱりそうおもてる。」
「ならば我等は主はやての思いを尊重するだけ、幸いあの男の剣には迷いや濁りは一切ありませんでした。」
「ありがとう、みんな、ハルトやったらみんな絶対仲良くできると思うわ。」
「この話はそこまでにして、後ははやてちゃんがプロポーズされてから考えましょう。」
この話は一旦終了した

第2話（後書き）

稚拙な文章ですが気長によんでください
誤字脱字は指摘してください
即日修正します

第3話（前書き）

連続投稿頑張ります

第3話

公開意見陳述会前日
約束どうりはやては俺の家に来てくれた
「話ってなんなん？」
そわそわしながら尋ねるはやて
「今日来てもらったのは大事な話を2つしたいからなんだ。少し聞いてくれるか？」
はやては頷いた
「今から19年前に地球の英雄の遺伝子を下に最強の戦士を作る。というプロジェクトをしていた違法研究所があってな、英雄の名はアーサー王そしてゼスト＝グランガイツの遺伝子を混ぜ合わせて実験は無事成功した。」
「う、嘘やろ！！」
「本当なんだ、俺が唯一の成功素体三歳の頃に摘発に来たゼスト隊によって俺は保護されてそのまま息子という形で育てられた、だからなはやて、俺はちゃんとした人間じゃないんだ。」
「そんなことない！！どんな過去があってもハルトはハルトやし、ちゃんとした人間や！！」
涙をこぼした訴えるはやて
「ありがとう、俺ははやてに出会うまで最前線での命なんていつ失ってもいいと思っていた。でもお前に出会って一緒に生きて行きたいて思うようになった。どんな時でも隣で笑っていてほしいって思うようになった、俺はどんなことがあってもお前を守ってみせるだから、だからはやて、機動6課の試験期間が終わって落ち着いたら、俺と結婚してくれないか？」
俺ははやての左手薬指に指輪をはめた
「…はい！！」
はやてからの返事は肯定だった

「わたしもハルトと一緒に生きて行きたい！！だから…これからよろしくお願いします。」

俺がはやてにプロポーズをして一時間くらいして落ち着いたはやてが話を切り出した

「わたしの家族の守護騎士達も一緒に面倒みてくれるんやろ？」

おそるおそる聞いてきたはやて

「あたり前だろ！！俺ははやての全てを受け入れる、はやての家族何だから当然だろ？そういえば名前どうする？はやて＝グランガイツってなんか変だし俺が八神にかえようか？」

「それやったらフェイトちゃんみたいに八神・Ｇ・ハルトとかにしたらどう？」

「名案だな。それじゃあ、明日は朝早いしそろそろ寝るか？」

「そうやね。」

その日俺たちは恋人から婚約者へと変わった

ＯＴＨＥＲＳＩＤＥ

はやてがハルトの家に泊まりに行ったあとの機動６課

明日は公開意見陳述会の警備ということもあり早い時間に訓練を終了していた

しかし、全員はやてのことが気になるのかそわそわしていた

「結局、今日呼ばれたのはなんだったんでしょうね？」

「私の勘だとプロポーズだと思うわよ？」

スバルが尋ねシャマルが答える

「はやてが出てもう三時間だぞ。何か連絡があってもいいんじゃないのか？」

「ヴィータ落ち着いたらどうだ？明日にはわかることなのだから」

落ち着かずにうろうろしていたヴィータにいうザフィーラ

「そういえば、今日のがプロポーズだとしたら名前どうするんだろうね？」

「そっか、はやて＝グランガイツってなんか変だもんね。」
なのはやフェイトに至ってもこの状況、彼氏がいないとはいえ年頃の女の子という事だろうか
時計の針はもうすぐ１２時を指そうとしていたころシャマルにはやてが預けていた携帯端末が光った
「はやてちゃんからのメールみたいね。」
「な、なんと書いてあるんだ？シャマル。」
一番反応が大きかったのはまさかのシグナムだった
「少し落ち着いたらどう？」
ちなみにエリオ、キャロ、ヴィヴィオはもう寝ている
「今から読むわね。え～と、夜遅くにごめんね。でもみんなが気になって寝れてなかったら困るから報告だけ、とりあえずわたし八神はやてはこの度婚約する事になりました。詳しい事はまた今度、みんな明日に備えてはよ寝てな。ですって」
「やっぱりプロポーズだったんですね！！なんて言われたんだろ？ティアなんて言われたと思う？」
「知らないわよ！知りたい事はわかったし私たちは先に寝ましょう、失礼しました。」
ティアナ、スバルは一足先に自室に戻った
「フェイトちゃん、私たちも戻ろうか？」
「そうだね。」
それに続くように部屋に戻ったなのはとフェイト、ギンガはスバル達の前に部屋に戻っていた
現在食堂に残っているのはシグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータの３人と一匹だけ
「よかった、はやてちゃん。」
涙を流して喜ぶシャマル
「おめでとうございます。主はやて。」
心からの賛辞を贈るシグナム
「まだ、あの男を認めたわけじゃないけどはやてが決めた事だ、は

やてを泣かしたりしたらぶっ飛ばしてやる。」
大好きなはやての事だから幸せになってほしいと思うヴィータ
「……」
無言のザフィーラ
表現の仕方にこそ違いはあるものの全員がはやての幸せを祈っていた
それから各自部屋に戻った
食堂には誰もいなくなった

第3話（後書き）

感想募集中

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8206y/

リリカルなのは～グランガイツの息子～

2011年11月25日21時48分発行